

平成 21 年 6 月 8 日現在

研究種目：基盤研究（A）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17203015
 研究課題名（和文） ケンブリッジ学派に関する経済学史的視座からの批判的評価
 研究課題名（英文） Critical Review of the Cambridge School from the View Point of the History of Economic Thought
 研究代表者 西沢 保（NISHIZAWA TAMOTSU）
 一橋大学・経済研究所・教授
 研究者番号： 10164550

研究成果の概要：ケンブリッジ学派の経済思想について、同時代のオクスフォードやLSE（London School of Economics）の経済思想も考慮しながら、次の3点を中心に共同研究を進め成果を得た。(1) マーシャルとマーシャル派の産業経済学・人間福祉の経済学、(2) 創設期の厚生経済学と福祉国家、(3) ケインズ革命とマクロ経済学の批判的評価。毎年、この領域で世界の研究をリードする海外の研究者を招聘して国際コンファレンスを開催して成果を報告し、また国際的な研究ネットワークの構築と研究水準の向上に努めた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	9,400,000	2,820,000	12,220,000
2006年度	8,800,000	2,640,000	11,440,000
2007年度	8,800,000	2,640,000	11,440,000
2008年度	8,800,000	2,640,000	11,440,000
年度			
総計	35,800,000	10,740,000	46,540,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学、経済学説・経済思想

キーワード：マーシャル、マーシャル派、ケインズ革命、厚生経済学、福祉国家、マクロ経済学、ケンブリッジ学派

1. 研究開始当初の背景

我々は、本研究に先行する基盤研究（B）「ケンブリッジ学派の多様性とその展開—思想、理論、政策の複合的研究」（2002-2004年）において、シジウィック、マーシャル以降のケンブリッジ学派の多様性とその展開を、思

想、理論、政策という複合的な観点から研究し、ケンブリッジ学派の内容と本質の批判的な解明を目的に研究を進めてきた。

19世紀末に資本主義の限界(limitations)と貧困が強く意識され、新しい経済学のパラダ

イムが求められるなかで、マーシャルを核に形成される新古典派経済学の全体像と、両大戦間期の失業を背景に形成されるケインズ経済学を中心に、ケンブリッジ学派の経済学を歴史と理論のコンテクストに即して検討し、現代経済学の反省の一つの材料にしたいと考えた。

本研究の発端の一つは、ローマ大学のマルクッソ教授、ピサ大学のラファエリ教授、ニース大学のアレナ教授、バーミンガム大学のバックハウス教授、ケンブリッジ大学のドント教授らとの出会いと協働の深化であり、この分野で世界の研究をリードする研究者との交流と協働は、我々の研究を大きく進展させてくれた。

本研究でいう「ケンブリッジ学派」は、19世紀末から20世紀中葉にかけてケンブリッジで経済研究を行った人々全般を指すものとして用いられる。ケンブリッジが広義の経済学研究で精彩をはなつた時期を対象にし、ケンブリッジの経済学者と経済学をできるだけ広く深く取り上げ、「ケンブリッジ学派」とは何であったかを歴史的、理論的に解明して一定の仮説を提供するとともに、その全体像を明らかにして経済学の反省の一つの材料にしたい。

現代経済学の発展におけるケンブリッジの貢献がきわめて大きいことは、明らかであろう。とりわけマーシャルとケインズは、20世紀の経済学の歩む道を大きく規定してきた。それにピグーの厚生経済学、スラッファに始まる費用論争からジョン・ロビンソンの不完全競争理論等を加えれば、この学派の重要性は明瞭である。

ケンブリッジ学派・ケンブリッジの経済学を広い視野から捉えなおし再評価するという試みは、内外を問わず意外なほど行われていない。マーシャルの経済学、ケインズの経済

学が個々に検討されることはあっても、総合的に捉えて検討するという試みはほとんどなされていない。我々は、それが緊張と分裂を繰り返しながら多様な展開を遂げてきたこと、またどのような点で連続性と断絶を見せているのかを、一次資料の検討ならびに近年の研究成果を取り入れながら（思想・理論・政策といった）複合的視点から検証したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、マーシャル研究とケインズ研究の分断化の垣根を取り払い、マーシャル経済学の誕生、継承、変容、およびケインズ革命の形成、ピグーを中心とする厚生経済学、費用論争から不完全競争論の形成を、歴史的、思想的（哲学的）、理論的コンテクストのなかで資料に即して批判的に再検討する。新古典派経済学の核となったマーシャル経済学の全体像の解明・構築とともに、シジウィック、ピグー、ロバートソン、スラッファ、ショーブ、カーン、ジョン・ロビンソンらの研究を進め、マーシャル経済学がどのように継承され、変容したかを、ケンブリッジ学派の多様性とその展開のなかで検証し、理論的および歴史的再構成を目指す。

我々はこれまでの研究を踏まえて、とくに以下の点を明らかにしたいと考えている。第1に、マーシャルからケインズにいたるケンブリッジ学派について、これまでの研究を踏まえて、とりわけマーシャル的産業経済学・産業組織論の伝統、およびケンブリッジにおける厚生経済学の伝統、福祉国家の理論的基礎についての研究をさらに進展させ、その豊富な多様性の実態を解明すること。すなわち、(1) マーシャル的産業経済学・産業組織論の伝統の解明、マーシャルと同時代のマーシャル派（マックレガー、チャプマン、レイトン、

フローレンス等)、およびアンドリュー、リチャードソンのような戦後のネオ・マーシャルリアンの産業経済学・産業組織論の解明、(2) シジウィック、マーシャル、ピグーを中心とする厚生経済学の創設過程とピグーの厚生経済学の全体像の解明、およびロビンズ以前の厚生経済学・厚生経済研究の多様性・多元性の解明、である。

第2に、現在にいたる「ケインズ革命」の過程を、理論と歴史のコンテクストに即して経済学説・経済思想の観点から包括的・批判的に検討することを通じて、今後のマクロ経済学の進むべき道を探ること。「ケインズ革命」は、今日にいたるまで多様な発展と分裂、批判・反批判を繰り返してきた。その過程を積極的・包括的に追究することは、マクロ経済学のあり方をめぐる経済学史的視座からの批判的評価を形成することになり、経済学界に対して少なからぬ問題提起をすることが期待される。

3. 研究の方法

我々の共同研究の特徴は、歴史的、理論的コンテクストを重要視し、ケンブリッジの経済学者の相互関係（往復書簡等の検証を含めて）に力点をおいて、ケンブリッジ学派の多様性とその展開をアーカイブズ・ワークに基づいて検証し再構成することである。イタリアの共同研究者と協力し、ケンブリッジ、LSEでアーカイブズ・ワークを重ねて、資料に基づいた研究を積み重ねた。その一部は以下のような形で公表された。Ed. by K. Caldari and T. Nishizawa, A. Marshall, “Some Aspects of Modern Industrial Life”, *Marshall Studies Bulletin*, 10, 2008, pp. 69-79. T. Hirai, T. Nishizawa, C. Marcuzzo, E. Sanfilippo, “The letters between John Hicks and Ursula Webb

September-December, 1935”, *Working Paper, Institute for Economic and Business Administration Research, University of Hyogo*, 207, 2006, pp. xxv+159.

研究の目的を国際的な水準で達成していくために、この領域で世界の研究をリードする海外の共同研究者の協力を得て、定期的なコンファレンスおよび個々のテーマに即したワークショップを通して国際共同研究を行ない、成果を公表するとともに、強力な研究上の国際ネットワークを構築した。

4. 研究成果

(1) マーシャルを産業経済学、進化経済学の視点から取り上げる研究が国際的に進んでいるが、ピサ大学のラファエリ教授、ニース大学のアレナ教授、フィレンツェ大学のダルディ教授らと共同研究を進め、マーシャル的な産業経済学・産業組織論の展開を現代的な視点から提示した。それは、マーシャルを理論経済学的に捕捉する視点とは著しく異なり、より広く歴史・倫理的思考をもち経済社会学的な側面からシュンペーターとの共通性を指摘するマーシャル像につながるものであり、現代における総合的社会科学の可能性を探る手がかりになると思われる。この側面の研究成果は、「マーシャルとシュンペーターの遺産 ; Marshall, Schumpeter, and Social Science」と題して行われたコンファレンス（2007年3月17-19日）、およびその成果を書物にした Shionoya, Y. and Nishizawa, T. eds., *Marshall and Schumpeter on Evolution. Economic Sociology of Capitalist Development*,そして、西沢保『マーシャルと歴史学派の経済思想』である。また、歴史的、進化的な視点を基礎に、マーシャルとマーシャル派の産業経済学・産業組織論を、マーシャルの同時代から現代のネ

オ・マーシャリアンまで視野に入れて、その実態と理論的伝統の解明に努めた。その成果は、ラファエリ教授と共同で組織したコンファレンス（2008年3月15-16日）、およびその成果として出版準備を進めている Raffaelli, T., Nishizawa, T. and Cook, S. eds., *Marshall and Marshallians on Industrial Economics* (Routledge) に代表される。そこでは、マーシャル経済学における『産業と商業』の位置づけ、経済的進歩と人間の進歩を併せて考える有機的成長論における産業組織・産業地域論の位置づけ、企業の内部組織よりも外部組織を重視し、産業内・地域内のネットワークを知識・能力が発達する「効率的な制度」とみるマーシャル派の産業組織論、そしてマーシャルの産業地域・集積論と産業集積の実態研究の関係、等々について新たな知見が提示された。

(2) 19世紀末に古典的資本主義の限界と貧困が強く意識され、社会主義的思考が広まるなかで、厚生経済学とイギリス福祉国家の基礎が生成する。シジウィック、マーシャル、ピグーによって確立されるケンブリッジの厚生経済学を中心に、創設期の厚生経済学と福祉国家について研究を進めた。関連するオクスフォードやLSEの経済学・経済思想も考察して、創設期の厚生経済学の多様性・多元性を解明し、ピグーによって確立される科学としての厚生経済学のなかで見失われた非厚生主義的なものの意義を現代的な観点から追究した。

ピグーに代表される厚生経済学の創設期はイギリス福祉国家の形成期（救貧法から福祉国家への転機）でもあり、多様な福祉の経済思想が存在した。Welfare, well-being は、広範な人々の議論の対象で、『厚生経済学』を構築したピグーの営為はその一つであった。しかし、科学としての厚生経済学を求め

るか社会改良・社会政策による福祉国家・社会国家を求めるかは、競合する多元的な領域であった。ピグーによる厚生経済学の専門化・科学化は、その時代の経済学を方向づけたが、オクスフォードではT.H. グリーンやラスキンの理想主義の影響が強く、オクスフォード—LSEを中心に、イギリスの社会政策学派（ウェップ夫妻、トニー等）、ホブソンに代表されるラスキンの厚生経済学、「厚生経済学のイギリス学派」を生み出した。ロビンズ以前の厚生経済学の多元性を検証することによって、規範的な厚生経済学のリアリティを回復し、厚生経済学の非厚生主義的側面を強調する現代厚生経済学との関係を考察する手がかりを提示した。この側面の成果は、複数のコンファレンスの成果をもとにした Backhouse, R. and Nishizawa, T. eds., *No Wealth but Life; Welfare economics and the Welfare State in Britain, 1880-1945* (Cambridge University Press) として近刊予定である。また、日本語で西沢保・小峯敦編『創設期の厚生経済学と福祉国家』（ミネルヴァ書房）を準備中である。その第一部は「ケンブリッジ学派の厚生経済学と福祉国家」、第二部は「オクスフォード派の厚生経済・福祉国家論」の予定である。

(3) ケンブリッジで展開した社会哲学が現代の社会哲学にたいして示唆するもの、今日の「新しい古典派」のあり方を、ケインズの経済学の視点から評価することが、もう一つの課題であった。「ケインズ革命」およびケインズ経済学の受容と批判の経緯を理論的に解明すること、そして現在にいたる「ケインズ革命」の過程を、理論と歴史のコンテキストに即して経済学説・経済思想の観点から包括的・批判的に検討し、今後のマクロ経済学の進むべき道を探ることの成果は、以下の業績に代表される。平井俊顕『ケインズとケ

ンブリッジ的世界—市場社会観と経済学』、
Hirai, T., *Keynes' s Theoretical
Development from the Tract to the General
Theory*, および Bateman, B. W., Hirai, T.
and Marcuzzo, C. eds., *The Return of
Keynes: Keynes and Keynesian Policies in
the New Millennium* (Harvard University
Press), forthcoming.

ケンブリッジ学派が現代経済学に与えた最も大きな影響は、「ケインズ革命」であろう。それは、今日にいたるまで、多様な発展・分裂(所得・支出アプローチ、不均衡論的アプローチ、ポスト・ケインズ派等)、批判・反批判(マネタリズム、合理的期待形成派等)を繰り返した。戦後のケインズ経済学に対する評価の変遷を詳細に辿り、戦後マクロ経済学の展開においてケインズ経済学が果たした役割を批判的に検討する。近年のマクロ経済学におけるケインズの伝統は、新古典派総合の流れを受け継ぐニュー・ケインジアン理論から、新古典派総合の基本的な見方を拒否するポスト・ケインジアンに至るまで、多様で幅広いスペクトラムが存在している。本研究の成果の一つとして、こうしたマクロ経済学の多極化現象とそうした状況下でのケインズ経済学の現代的意義を、渡辺良夫・袴田兆彦編『ケインズ経済学と戦後マクロ経済学の展開』(ミネルヴァ書房)として、出版準備中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ① 西沢 保、「マーシャルにおける経済学と倫理」、『経済研究』(一橋大学経済研究所)、59 - 1、2008、pp. 46 - 58、査読有。
- ② 下平裕之、「20 世紀初頭におけるケンブリ

ッジ学派の消費者協同組合論」、『山形大学人文学部研究年報』、5、2008、pp. 187-204、査読有。

③ Toshiaki Hirai, “How, and For How Long, Did Keynes Maintain the *Treatise* Theory?”, *Journal of the History of Economic Thought*, 29, 2007, pp. 283-307, 査読有。

④ 袴田兆彦、「『貨幣論』における基本方程式の形成—『貨幣改革論』から『貨幣論』へ—」、『中央大学経済研究所年報』、38、2007、pp. 281-309、査読無。

⑤ Yoshio Watanabe, “The Post Keynesian Theory of Endogenous Money Supply as a development of Keynes' s Monetary Thought”, *The Bulletin of Institute of Social Sciences, Meiji University*. 30-1, 2007, pp. 1-19, 査読有。

⑥ Toshiaki Hirai, “How Did Keynes Transform His Theory from the *Tract* into the *Treatise*?”, *European Journal of the History of Economic Thought*, 14, 2007, pp. 325-348, 査読有。

⑦ 西沢 保、「福田徳三の厚生経済研究とその国際的環境」、『経済研究』(一橋大学経済研究所)、57-3、2006、pp. 193-207、査読有。

[学会発表] (計 6 件)

① K. Caldari and T. Nishizawa, “Marshall' s Ideas on Progress: roots and diffusion”, ESHET-JSHET Conference “The Dissemination of Economic Ideas”, 2009 年 3 月 22 日、一橋大学。

② Hiroyuki Shimodaira, “Dennis Robertson on Industrial Society: *The Control of Industry* reexamined”, International Workshop: “Marshall and Marshallians on Industrial Economics”, 2008 年 3 月 16 日、一橋大学。

③Tamotsu Nishizawa, “Industry and Trade Reconsidered: Marshall on Britain’s Industrial Leadership”, International Workshop: “Marshall and Marshallians on Industrial Economics”, 2008年3月15日、一橋大学。

④Kenji Fujii, “Fairness in Marshall: Fair Wage and Capability-Development”, International Workshop: “Marshall and Marshallians on Industrial Economics”, 2008年3月15日、一橋大学。

⑤Atsushi Komine, “Entrepreneur as leader: Frederic Lavington on Modern Business Society”, History of Economic Thought Society of Australia, 2007年7月13日、The University of Queensland, Australia.

⑥Toshiaki Hirai, “To What Degree did Keynes Approach the General Theory in 1933?”, History of Economic Society, 2007年7月8日、George Mason Univ., Washington, USA.

〔図書〕(計 8 件)

①Ed. by Y. Shionoya and T. Nishizawa, Edward Elgar, *Marshall and Schumpeter on Evolution. Economic Sociology of Capitalist Development*, 2008, pp. 285.

②西沢 保、岩波書店、『マーシャルと歴史学派の経済思想』、2007年、pp. 646。

③平井俊顕、ミネルヴァ書房、『ケインズとケンブリッジの世界 - 市場社会観と経済学』、2007年、pp. 412。

④Toshiaki Hirai, Routledge, *Keynes’s Theoretical Development From the Tract to the General Theory*, 2007, pp. 280.

⑤平井俊顕編、上智大学出版、『市場社会とは何かーヴィジョンとデザイナー』、2007年、

pp. 330。

⑥小峯敦、昭和堂、『ベヴァリッジの経済思想 - ケインズたちとの交流』、2007年、pp. 461。

⑦西沢保、東洋経済新報社、第9章「創設期の厚生経済学と将来世代 - マーシャルとイギリス・ケンブリッジ」(鈴木興太郎編『世代間衡平性の論理と倫理』所収)、2006年、pp. 229-253。

⑧小峯敦、ナカニシヤ出版、『福祉国家の経済思想』、2006年、pp. 279。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西沢 保 (NISHIZAWA TAMOTSU)
一橋大学・経済研究所・教授
研究者番号：10164550

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

平井 俊顕 (HIRAI TOSHIAKI)
上智大学・経済学部・教授
研究者番号：60119112

袴田 兆彦 (HAKAMATA YOSHIHIKO)
中央大学・商学部・教授
研究者番号：20147002

藤井 賢治 (FUJII KENJI)
青山学院大学・国際マネジメント研究科・教授

研究者番号：20189989
渡部 良夫 (WATANABE YOSHIO)
明治大学・商学部・教授

研究者番号：50130844
小峯 敦 (KOMINE ATSUSHI)
龍谷大学・経済学部・教授

研究者番号：00262387
下平 裕之 (SHIMODAIRA HIROYUKI)
山形大学・人文学部・准教授

研究者番号：30282932